

# 後崇光院筆の古筆切——新出『八幡愚童訓』切の紹介——

日本文学／准教授 岸本理恵

## 一、はじめに

室町文化の中心的存在とも言える後崇光院（一三七一—一四五六）は、崇光天皇の孫、伏見宮榮仁親王の息として生まれるが前半生は不遇で、応永一八年（一四一一）四〇歳で漸く元服、五四歳で親王宣下を受けるが出家を余儀なくされた。伏見宮家の再興に尽力し、正長元年（一四二八）長子が後花園天皇となり、自らは果たせなかったが皇位を子が受け継ぐこととなった。その後、文安四年（一四四七）太上天皇の尊号を受ける。後崇光院というのは諡号である。

後崇光院が応永二三年から文安五年（一四四八）まで書き続けた『看聞日記』は、後崇光院身辺の出来事や政治的な行動を記すに留まらず、室町時代の社会の解明に資するものである上に、当時の文化の幅広い記録としても注視されている。このたび、そのような後崇光院を筆者とする古筆切一葉を拝見する機会を得たので、以下に紹介する。

## 二、新出断簡の書誌と本文

ここに紹介する切は、聴松室蔵の古筆手鑑「精虔」に押された一葉。大きさは、縦二六・〇cm、横一〇・五cm、六行、もとは卷子本であるらしい。内容は『八幡愚童訓』の一部で、本文は次のとおり（行頭に行数と、適宜句読点を付し、返り点は省いた、図版は本稿末に掲載）。

- 1 死去のよしを申けるこそいまくしかりしか。其上、又若宮の御前に
  - 2 敵方に向て立られたりし御釵、院の御方へたふれけり。神意<sup>ニ</sup>あはぬ
  - 3 御折精、不吉の瑞相おそろしくそおほえし。上皇の御気色もかはり、
  - 4 供奉の卿相雲客も心をさはかしけり。楚莊無災以致<sup>シ</sup>戒懼、魯
  - 5 哀禍大<sup>ニシテ</sup>天不降譴。今已此恠異あり。御慎あらましかは廟神いかてか
  - 6 すて給はん。掌をさす神の告をも恐給はず、欲悔<sup>ヒ</sup>非於既往<sup>キヤウ</sup>慎過於將
- 『八幡愚童訓』は『日本思想大系20 寺社縁起<sup>1)</sup>』に内容の大きく異なる甲乙の二種が翻刻される。当該の切は甲種に近く、一九八頁下段から一九九頁上段にかけての箇所<sup>2)</sup>に該当する。筆跡は、琴山印の極札が「後崇光院」とすることく、詳しくは後に検証するが後崇光院の真筆と認めてよい。『新撰古筆名葉集』に「同（巻物切）縁起真名カナ交り」とあるのは当該切を指すものであるろう。『八幡愚童訓』は蒙古襲来に際しての石清水八幡宮の神威を説き記した靈驗記とされる。漢文訓読調の文体で、当該切も末尾部分がそうであるように所々には漢文の箇所もあり、蒙古の牒状なども漢文で記される。そのためか、『八幡愚童訓』諸本は漢字片仮名交じりによる写本が多いが、当該切は漢字平仮名交じりである点が注目される。『新撰古筆名葉集』の「真名カナ交り」という記述もこのことに着目してのものかもしれない。

ツレは、小林強氏によって一一葉が紹介されている。新出の当該切を加えて以

下に列挙する。<sup>(2)</sup>〔 〕内は、各切の本文の『日本思想大系』該当箇所頁数である。

- ① 宇和島伊達文化保存会蔵手鑑「筆の海」〔170下段〕
- ② 平成新修古筆資料集 第3集〔172上段・下段〕
- ③ 第一〇七回京都近鉄百貨店古書籍大即売会目録〔173下段〕
- ④ 古筆手鑑4・12（久曾神昇氏蔵）〔180下段〕
- ⑤ 小野尚志氏蔵（論文掲載の図版a）〔181下段〕
- ⑥ 白鶴美術館蔵手鑑（伝尊良親王筆）〔188下段〕
- ⑦ 小野尚志氏蔵（論文掲載の図版b）〔191上段・下段〕
- ⑧ 国文学古筆切入門〔194下段・195上段〕
- ⑨ 思文閣墨蹟資料目録59号〔196下段〕
- ⑩ 聴松室蔵古筆手鑑「精虔」〔198下段・199上段〕
- ⑪ 小野尚志氏蔵（論文掲載の図版c）〔203上段・下段〕
- ⑫ 高城弘一氏蔵手鑑「古今筆鑑」〔204上段・下段〕

一二葉という分量は『八幡愚童訓』全体からすると十分と言えないものではない。しかし、後崇光院筆切の現存箇所を『日本思想大系』（本文は170頁上段～205頁上段7行目）と比較すると、最も冒頭に近い本文をもつ断簡①は、ほぼ冒頭部分と言つてよい。また最後の断簡⑫は巻末に近い箇所である。つまり、一二葉は『八幡愚童訓』の一部分に偏ることなく全体が切られていることがわかる。

なお、『八幡愚童訓』の諸本については、小野尚志氏による『八幡愚童訓諸本研究 論考と資料』<sup>(3)</sup>に詳しい。その小野氏が「現在の私には未だよく見えない系統図」と言つて、諸本系統が複雑であることを指摘する。後崇光院筆切についても、甲種と乙種で比べれば甲種に属すると判断できるので当該箇所を『日本思想大系』のページ数で示したが、細かな表現はやはり異なる箇所が多く、一致する系統を指摘することは難しい。

蒙古襲来を機に書かれたとされる『八幡愚童訓』は、成立が一二〇〇年頃とされる。現存する完本は近世写本が多く、室町期の写本は数点現存するのみである。小野氏の他にも、『群書解題』で西田長氏が「その分け方も諸本まちまちである。その内容においても諸本それぞれに小異があるが、これは次第に潤色・増補せら

れていった発展の過程をそのままに示しているものと考えられる」と指摘するようになり、諸本は各々改変され成長したようである。だからこそ、後崇光院筆切は書写年次が後崇光院の生存期間に限定できる貴重な資料といえるものである。

諸本を整理した小野氏でさえ系統分けの難しさを指摘されるものであり、後崇光院筆切についても俄に特定できるものではないが、その上で少し考察を加えておこう。小野氏は断簡⑦⑧⑪から、後崇光院筆切は小野氏分類の甲類系B類本に近いとされる。確かに、『日本思想大系』よりはB類本に一致するところが多いものの、大きく異なる箇所もある。例えば、断簡②は六～七行目、

いかてか人王の使とはなすへき。さらは官をさつて遣へし

とあるが、甲類系B類本・『日本思想大系』ではそれぞれ、  
争力人王ノ使トハ可成、サラハ除目ヲヲコナイ、官ヲ授テ可遣（甲類系B類本）  
争力人王ノ使ニ可成。所詮除目ヲ行テ官ヲ成テ可遣（思想大系）

とあつて「除目を行う」内容が加わる。この箇所、寛文四年刊の版本では、  
いかてか人王のつかひとはなすへき。さらば官をさづけやるべし

とある。甲類系B類本・『日本思想大系』よりも後崇光院筆切に近いのは版本である。完全な一致を見るわけでもないし細かな異同はやはり多く、全一二葉という分量ながら、小野氏も可能性として断簡と寛文版本との近似性を指摘するように、版本との近さが目に付く。とすれば、寛文版本の本文は室町書写の、しかも後崇光院真筆本と近い本文ということで、あながち末流本文とはできないことになる。しかも、版本は後崇光院筆切と同じく漢字・平仮名交じりである。

### 三、『八幡愚童訓』切と様々な後崇光院筆の古筆切

後崇光院筆『八幡愚童訓』切の筆跡は、断簡②や⑧等ツレの解説で既に後崇光院の真筆と認められている。また、後崇光院は『看聞日記』をはじめ真跡資料が多く残り、特徴的で分かりやすいともされている。以下に、『八幡愚童訓』切と『椿葉記』（宮内庁書陵部蔵・伏5）を比較してみる（丸数字は断簡の番号）。

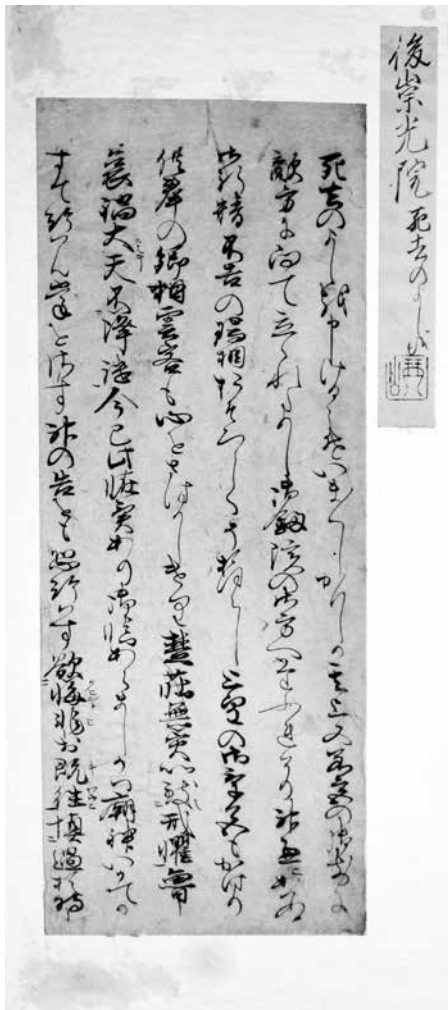
全体にやや扁平で、太い線だけでなく細い線も粘り強い。【表】の「あ」は、特に扁平で「め」に近いほどで、特に上部が陥没している。「あり」「なり」の



院の関与が記される。後崇光院筆と認められる古筆切としては、『新拾遺和歌集』<sup>(8)</sup>や、後崇光院一三歳の年に成立した『新統拾遺和歌集』なども確認される。先行する代々の勅撰集は、新たな勅撰集編纂にあたっては重要で不可欠な典籍である。このように『看聞日記』に記されない歌書・典籍も多く写し読んでいたと考えられる。古筆切はわずか数葉であっても、その集を後崇光院が読み写していたことを裏付けるもので、後崇光院の文学活動を確実に伝えているものといえる。

#### 四、まとめ

以上、後崇光院筆『八幡愚童訓』切を紹介し、あわせて後崇光院筆と認められる古筆切の意義について考察した。後崇光院には連歌記録や自筆和歌集のほか絵巻なども多く現存する。『看聞日記』は詳細で分量もあってこうした資料を用いての研究が行われてきた。しかし、資料が豊富であるとはいえず全てが現存しているわけではない。こうした古筆切も後崇光院の文学活動を伝えているものであり、同等に考察していくべきものである。また、後崇光院真筆の資料は、伏見宮家の典籍を受け継ぎ、自らも文学や音楽・芸能等に深い造詣を示した後崇光院の元に集まったものであるから、本文としての資料的意義も大きい。



(注)

- 1 『日本思想大系20 寺社縁起』岩波書店・一九七五年。「八幡愚童訓」の翻刻・解説は萩原龍夫氏。
- 2 小林強「出典判明仮名散文関係古筆切一覽稿」(『人文科学』一二二〇〇七年三月)。断簡⑤⑦⑪は、注5小野尚志氏の御論に掲載がありa) c)はそこで付された番号。小野氏はこの御論の中で、手鑑「華毫肆」にツレのあることを指摘されるが、小林氏はこれを不明とし、稿者もこれを確認出来ていないのでここには挙げなかった。
- 3 小野尚志「八幡愚童訓諸本研究 論考と資料」(三弥井書店・二〇〇一年)
- 4 『群書解題 第一巻中』(續群書類従完成会・一九六二年)
- 5 注3「八幡愚童訓諸本研究 論考と資料」の「四「八幡愚童訓」の断片―後崇光院宸筆巻物切―。なお、小野氏分類の甲類系B類本は、天理大学附属図書館吉田文庫蔵本、麦水文庫蔵本、京都国立博物館阿刀家寄託本など五本がある。本稿で引用するB類本本文は、小野氏翻刻の麦水文庫蔵本による。
- 6 『徳川黎明會叢書 古筆手鑑篇三 蕨叢・桃江・文車』(思文閣出版・一九八六年)
- 7 『平成新修古筆資料集 第一集』13など。
- 8 三井文庫蔵「高松帖」34など。
- 9 川崎市市民ミュージアム蔵 古筆手鑑「披香殿」24。

〔付記〕資料の閲覧にご高配賜り図版の掲載を許可くださいました方々および諸機関に厚く御礼申し上げます。なお、本稿はJSPS科研費(16K02370)の助成を受けたものです。